

# OUMC

大阪大学山岳会 会報

No.14

2012年6月

発行 大阪大学山岳会

〒562-0031 箕面市小野原東4-19-45

大野義照方

## やった！徒歩で列島縦断 2700キを80日かけて

井上 太一

昨年11月5日、鹿児島県・入来温泉を出発、朝焼けの国道を南に歩きだした。3時間後に最後の峠を越え、暖かい南風を感じると同時に鹿児島湾が現れ、ピッチが速くなった。それでも山道は長く、市街地に入ったのは5時間後。ザビエル教会や彼の上陸地点を訪れて、3カ月ぶりの家族が待つ鹿児島中央駅に着いたのは夕方5時11分であった。この日は結局、11時間で43キ歩いた。稚内を8月18日に出発して80日目に日本列島縦断2700キ徒歩旅行は幕を閉じ

たのである。植村直己氏が1971年、南極大陸横断の距離感を体得しようと稚内から鹿児島まで3千キを踏破したと知ってから、同じコースを歩いてみたいといつも思っていたが、仕事を持つ身には叶うべくもなかった。そして昨年春先に退職し、私としては二度目であるが、友人5人とフランスからピレネーを越えてスペインのサンティアゴ、そしてフィステーラ岬まで900キを歩き通した。帰国後に「体力が付いているうちに」と



ノシャップ岬で

列島縦断に取り組んだ時は、実に構想を練ってから40年近くたった61歳であった。暑さ寒さを避けるためには、春に九州から北海道に北上するか、秋に北海道から九州に南下するかしかなかっただろうと考

え、植村氏と同じ後者のコースとした。グーグルマップで最短コースを調べ、稚内から下関までできるだけ日本海沿いに歩き、その後、門司から大牟田、熊本経由で鹿児島まで歩くコースとし、総距離2400キと算出した。そして1日25キは歩き、100日以内で完歩と計画した。

そして、お盆が済んで航空券も安くなった8月17日に羽田から稚内に飛んだ。その日のうちにノシャップ岬にバスで行き、不安と緊張の面持ちで記念撮影してから数キ歩いて稚内市街のビジネスホテルに夕方着いた。夏だというのに涼しいうえ、ロシア語の看板の店も多く、異国に

着いた感覚だった。翌日から日本海沿いに利尻を右手に見つつ、民家はもちろんのこと車もまばらな道をひたすら南下し、夜はウニ、イクラ、カニ、エビなどの海鮮料理を楽しんだ。留萌から札幌、そして洞爺湖畔、長万部を経て函館に着いたのは出発から3週間後だった。宿がなく、海岸や山中でテントを張ったのは5回あるが、鹿はともかく、現れないクマに怯えた。苦行僧の如く足のマメとその後遺症に悩み、そして歩道のないトンネルと台風風の風雨に苦しみながらも旅館で十分疲れを取り、ようやく日本列島縦断に自信を持てた北海道であった。

天の川やおおらかな山川の大自然に感嘆したり、源泉100%の温泉で足の手入れをしたり、友人の実家に立ち寄ってお世話になったりして北の旅情もたつぷりと味わうことができ、これから行く本州への期待が膨らんだ。

青函連絡船で海を渡り、9月8日、青森駅から再出発した。八郎潟までは内陸部、その後は敦賀まで日本海に沿って快調に距離を稼いだ。多くの県や市町の特徴をじっくり比較でき、親鸞聖人上陸碑など、突然現れる名所旧跡や知られざる神社仏閣を見学し、そして各地の教会を訪問できたのは徒歩旅行ならではの褒美である。また東京の友人が2人、それぞれ新潟と富山に会いに来てくれ、海鮮料理屋で励ましてくれた。

しかし、日本海の荒波も数週間続くと食傷気味になり、10月6日、敦賀で予定を変えて、山陰ではなく南に方向を転じ、琵琶湖から山陽道を目指した。峠を越えて琵琶湖を眺めた時、そして道の駅で久しぶりの関西弁を聞いた時は、30年東京に住もうが、私はやはり関西人であると強く意識した。高島市で「琵琶湖周航の歌資料館」を見つけて入った時は、在学中によく歌ったことを思い起こし、感無量であった。尼崎では修道院を訪問し、お世話になったシスタ

ーが健康そうなのでひと安心した。京都から加古川までの4日間は親戚や兄弟の家に泊まり、須磨や舞子の砂浜では一人座り、少年時代のノスタルジアに浸った。

山陽道の瀬戸内海沿いでは毎日、日の出から日の入りまで歩き、引き潮から満ち潮へと変化する海と島々を飽きずに眺めた。倉敷では観光客に交じって大原美術館を見学し、尾道では久しぶりの墓参りをした。泊めてくれた広島の人や、東京からわざわざ駆けつけて1日伴歩してくれた友人には感謝している。下関では鯨食文化を守るNPOを立ち上げた店で鯨料理を堪能した。

九州入りは出発から71日目の10月



鹿児島中央駅で家族と

26日であった。門司から大牟田まで内陸部を進み、有明海沿いに南下し、出水市から国道328号線に沿って鹿児島市を目指した。筑紫神社や長崎街道など歴史を身近に感じる道であった。学生時代に漁師宅で4泊し、夜から早朝の漁を毎日手伝った体験がある水俣では、駅前割烹の刺身がことのほか美味であった。江戸時代からの標識は薩摩・江戸と書かれていた。鹿児島県に入って最初の警察署には「検問所」の札がかかり、かつて鎖国的とされた薩摩のお国ぶりが見えておかしかった。

◇

OUMCの先輩や後輩で今後、列島縦走に挑戦する人はいないだろうと予想しつつも、参考になることを思いつくままに記します。

(1) 足のマメには前半苦勞し、新潟の石井スポーツで少し大きめの登山靴を購入して、ようやくトラブルから解放された。アスファルト道ではいつも同じ力が足に加わるので山歩きより過酷であり、靴の選定には特に気をつけ、2カ月は履いて慣らすことが肝要である。ザックの重さは初め7キ(水・食料含まず)であったが、富山で軽量テントと寝袋を家に送り返し、その後も不用品を捨てて最後は5キ弱となった。着替え一式、カッパ上下、傘、懐中電灯、

そして銀行カードさえあれば、あとはなんとかなる。植村氏は初めから身一つの空荷であったとのこと。

(2) 81日間の旅行中、初日は夕方1時間歩いただけだし、足の手入れや祭り見学による完全休憩は3日間あり、歩いたのは実質7日間であった。1日平均35キ歩いたことになる。そのうち40キを超えたのは21日あり、最高は12時間、48キ(以上は万歩計の数字)であった。歩く速さは毎時5キだが、休憩や昼食込みで平均4キであった。当時30歳の植村氏の52日には遠く及ばないものの、計画の100日と比べて20日短く、60歳代としてはおそらく新記録であろう。足のマメはともかく、足腰のトラブルは無く、ふくらはぎや太ももの筋肉痛がなかったのは不思議である。丈夫に生んでくれた母親に感謝している。

(3) 困ったことは行く先々での宿の確保である。当てにしていた町で宿がない時はがっくりくる。そこで、できるだけ鉄道沿いに歩き、日の入り前に着いた駅(多くは無人駅)で終わりとし、近くのぎやかな町に電車で行き、駅前のビジネスホテルを探し、翌朝、前日の駅まで始発電車で戻って旅を再開した。話し相手がほしい時は旅館に泊まり、女将とよくしゃべった。

(4) 一昨年、あるきっかけで健康のために自称ベジタリアン（そしてフルータリアン）になり、肉・卵・

乳製品をできるだけ摂らないようにしたところ、3カ月くらいで体重が8<sup>キ</sup>も減った。今回の旅行で更に2<sup>キ</sup>軽くなって、風雨時に歩いてても風邪も引かず、体調はほぼ完璧に推移した。旅中は毎朝、リンゴやバナナ、キウイを食べ、昼食はコンビニでカット野菜とおにぎり、アンパンなどを購入するか、食堂で野菜炒めや「野菜多めのチャンポン」などを頼んだ。夜は海藻サラダと刺身など魚中心で、肉や鳥料理は極力避けた。いずれにせよザックが10<sup>キ</sup>軽くなったのと同じ効果があったのは確かである。

(5) 空海、芭蕉、松陰をはじめ昔の人は実によく歩いている。パウロやザビエルなどキリスト教の聖人も宣教で歩きながら考え、信仰を深めた。その人たちの追体験をしたいというのが今回の旅行の目的の一つだった。黙々と歩いていると色々アイデアが浮かぶ。それらをメモしたうえ宿でノートに整理して考察すること、日頃悩んでいた課題などが水解することが多くあり、昔の人は旅で鍛えられたことがよく理解できた。また、道中聞いたラジオの教養番組は面白かった。日頃、テレビを

見て頭を使わず、いかに創造性をなくしているかと実感できた。

(6) 無駄なく歩くために、そして道に迷わないために、おもに国道や県道を歩いたが、設計者は車両中心で歩行者のことを全く考慮していないと憤慨した。市街地では傾斜だらけの歩道で歩きづらく、子どもや高齢者がかわいそうである。そして市街地を離れると歩道がいつしかなくなり、トラックがすぐそばを爆走するのは最後まで悩まされた。親不知、子不知のような歩道のないトンネルはまるで地獄である。歩道があっても整備されてなく、アスファルトがめくれ、草木がぼうぼうと生い茂り、雨の日は車道からの激流があり、水たまりや泥が当たり前である。台風の日もなんとか歩いたが、今となつては全てが懐かしい思い出である。

(7) 稚内空港に着いてから鹿児島中央駅に着くまでに支払った生活費は65万円で、1日当たり8千円であった。多くは宿泊費と食費、そして飲み代である。サンテアゴ巡礼中は1日5千円だったので、徒歩旅行なら物価の安いスペインをお勧めしたい。

生まれて初めて小説を書き上げた人の発言がネットに載っており、そ

れがちようど私の気持ちを表しているので紹介したい。

「みんなは小説が面白かったって言ってくれている。でも、その後きまって『オレも実は時間があれば小説を書きたいって思っているんだよね』って付け加えてくる。『やろうと思つた』と『やつた』との間には、

## マッターホルン登頂 32年ぶりのリベンジ

明神 知

ものすごく大きな河が流れているよね」

そう、私は、大河を越えて「やつた」と今は大満足している。最後に、快く見送ってくれて、家を守り、いろいろ調べ、教えてくれた妻に深く感謝したい。

(1975年理学部卒)

1979年の敗退以来、いつかはリベンジをと思つていたマッターホルン(4,478<sup>メ</sup>)。体重も増え、腰痛が出て、永遠に登れなくなるのでは?との思いが強くなり、昨年初めからトレーニングを始め、8月3日に登頂に成功しました。

7月28日(曇) ツエルマットのアルパインセンターに行つてみると、当初予定の7月31日は雪が多くて登れない。8月2日なら可能性があると、このので予定を変更。翌日のRifflhorn(2,928<sup>メ</sup>)の訓練

は予定通り実施とのことでした。

29日(曇) 朝から登山電車でRifflhornに向かいました。地元がイドのマーチン、私と、一緒に訓練

を受けるスイス人の3人です。天候も回復してマッターホルンを眺め、真下にゴルナーグラーツ氷河の高度感があり、楽しいクライミングでした。

30日(晴) 高度順応の日。ロープウェイで行ける最高地点3,820<sup>メ</sup>のクライン・マッターホルンまで登り、1時間半でブライトホルン(4,164<sup>メ</sup>)の頂上です。

31日(晴) アルパインセンターに行くと、夏山は3日からスタートだという。2日は家内とゴルナーグラーツホテルを予約していたので、3日なら諦めようと、いったんキャンセル。マッターホルンに登れないならと、家内と別々に飛ぶタンデムのの



パラグライダーを申し込みました。でも、じっくり話し合った結果、ゴルナーグラートには家内1人が泊まることにして、翌日、再申し込みすることにしました。

**8月1日(晴)** アルバインセンターに行く、連絡のない人がいて可能性はある、あすの朝決定すること。最後の望みを託してパラグライダーへ。ロートホルンから飛び立って約20分のフライトはマッターホルンを背景にして鳥になった気分でした。

**2日(晴)** アルバインセンターに行く、私が代わりに行けるから夕方までにヘルンリ小屋に入れという。私のガイドはライスナーという

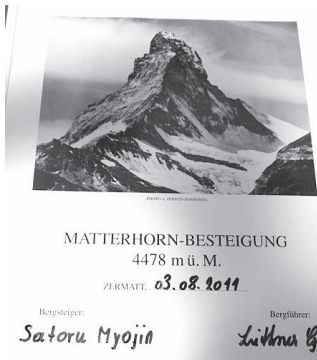


頂上で

ザルツブルグの国際ガイドです。ヘルンリ小屋まで登り、午後6時半から顔合わせと注意がありました。夕食後に装備点検を受けて午後8時半には就寝です。

**3日(晴のち雨)** 午前3時に起床して朝食後、ガイドが発発時間を指示していきます。地元ガイドのボス、シモンがトップで4時出発。私達は4時半に10番目ぐらいの出発です。外はまだ真つ暗ですが、星空の快晴。第1関門のソルベイ小屋に2時間40分に到着。小屋上部は微妙なクライミングが続きます。特に、頂上稜線に出る核心部では腕力を使い果たして何度もトライ。3度目に乗り越えました。肩から上部の雪田は高度で息が続かず、文字通りガイドに引っぱり上げてもらいました。

午前10時に頂上です。この日の7番手ぐらい。西のモンブラン側から雲が上がって来ていましたが、スイ



ヘルンリ小屋でもらった登頂証明書

ス側はくつきり見えていました。

午後から雷雨の予想で、頂上で余韻を楽しむ間もなく下山です。避難小屋の下部で雷雨。ヒヨウも降ってきて下山を急ぎます。午後3時20分にヘルンリ小屋に下り立ち、ほとんどアイゼンを着けつばなしの11時間の長いアタックの終了です。

実は、この日はシャモニーに移動する予定でした。シャモニー行き列車の最終が午後5時半。シユバルツゼーのゴンドラ最終が午後5時。ほ

## 阪大ウォールが完成

### 会員諸氏の支援に感謝

山岳部長 森藤 正人

かねてからの計画であったクライミングのための室内壁「阪大ウォール」(仮称)が完成し、4月7日、大野会長をはじめとする山岳会員や中之島アウトドア関係者の列席のもと披露会を行うことが出来ました。その後、安全マットの設置や登攀ルートの最終調整が行われ、4月27日に使用可能となりました。山岳会員の皆様には大きなご支援をいただいたことに深く感謝いたします。阪大ウォール建設の計画がどこから出てきたのか記録を調べてみた

ろぼろの体にむち打って雨の中を走って下りました。ゴンドラ最終便に何とか乗り込み、カミサンの待つツエルマツト駅に着いたのが5時40分。観光案内所に相談して延泊です。このリベンジ登頂は31日の予約が2日に延期、さらにキャンセル待ちで3日となった、際どいワンチャンスでした。この後はしばらく天候が崩れたので、運がよかったと言えます。

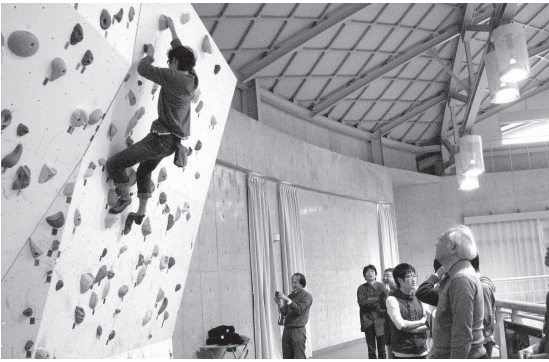
(1978年基礎工学部卒)

ら、一昨年6月の山岳部存亡の危機に際して数名のOBで議論した際に発案されたようです。私が保存しているメールでは河野美樹さんが最初に言及しています。そのときは遙か遠くの夢と想っていたのですが、現役部員が綿密な計画を立てて大学側と折衝を重ねた結果、昨春秋、資金を山岳部側で用意することを条件に吹田体育館にウォールを設置することが許可されました。その後、業者との打ち合わせや山岳会、中之島山岳部(アウトドア部の前身)OB会

との協議を経て資金調達にめどをつけ、このたびの完成となりました。

ウォールは高さ約4m、幅約10.8m、安全マットの厚さ約25cm。使用ホールドは約600個あり、施工は専門業者のナカガイクライミングジム(大阪府摂津市)に依頼しました。

ここに至るまでには多くの人たちの助力や幸運があったと思います。が、実現にこぎつけることができた何よりの要因は、ウォールに向けた学生たちの想いとそれに支えられた行動力だったと思います。他大学でのウォール設置状況を調べたり、阪大内の建設できる場所を探したりと、実現に向けて熱心な活動を行い、最終的に大学側を動かしたことは見



ウォールを登る現役部員

事なものです。

阪大ウォールには毎日のようにクライマーが集まってにぎわっています。当初の目的であった部の存続もとりあえずは何とかなりそうです。OBの皆様には改めてお礼を申し上げますとともに、クライミングへの情熱と冷静な頭脳を兼ね備えた若い部員たちへ今後とも一層のご支援をお願いします。

## 部員獲得に朗報

山岳部4回生 西村 俊輝

阪大ウォールは山岳部にとって熱望していたものでした。これまで新歓の時期となっても、計画したハイキングは悪天候で中止となることも珍しくなく、フリークライミング体験のためジムに行くのも、時間と費用が大きな負担となっていました。大学のキャンパス内にウォールができた結果、これらの問題は一掃され、現役部員の技術向上にもつながると信じています。

そもそもフリークライミングは登山を前提とした手段としてのアルパインクライミングから、できるだけ危険を排除して、岩を登ること自体を目的としたスポーツです。近年、急速に発展し、国内外を含め多くのコンペと呼ばれる競技会が開かれ、

2020年オリンピックの追加競技候補にもなっています。

大学のキャンパス内、それも体育館の2階という立地は、登っているクライマーを1階から見上げることができ、まるでコンペを見ているようにインパクト絶大です。もちろん安全面に関しては委託した業者(ナカガイクライミングジム)と十分に協議し、最大限に注意を払っています。

阪大ウォールを足掛かりに多くの部員が入部してくれると思います。山岳部が存続の危機を乗り越え、ますます発展していくことを願っています。

最後になりましたが、この計画の実現のために尽力して下さった山岳会の大野会長、山岳部長の森藤先生、アウトドア部の清水・水木両先生、何度も相談に乗っていただいたOB、OGの皆様には現役部員を代表してお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

## 79氏から191万円

### 建設費募金に

阪大ウォール建設にかかった費用は工事費だけで約254万円。今年1月から山岳会員を対象に寄付を募ったところ、79氏から計191万円

が寄せられた(5月10日現在)。これに中之島山岳部OBからの寄付金、現役山岳部の拠出金を加え、不足分は山岳会の積立金で補うことにしている。

寄付金をいただいた会員は次のみ  
なさん。(50音順)

五百蔵弘典、石澤命久、石原敏雄、今村義弘、岩永剛、上松一雄、打出英樹、大石真也、大川和秋、大倉徹雄、大島輝夫、大島浩、大角美佐子、大宅幸夫、大西啓之、大野義照、岡田博司、岡久光明、岡部友三朗、奥山宏臣、尾崎夏樹、片山徹、兼清喜雄、鹿野信吾、木村裕一、黒田治朗

草尾寛、黒石芳夫、河野美樹、後藤正教、小松二郎、三枝礼子、榎原淳、鷺沢忍、佐藤貴美子、佐藤健哉、野威和雄、重田邦男、科野昌蔵、白井達郎、住吉仙也、田井英男、大工原恭、高木俊夫、高田邦雄、玉井康雄、田村俊秀、辻信男、坪井和子、寺田浩昭、東條公資、戸叶聡

朽尾豪人、豊坂昭弘、中岡和哉、西川元夫、野口明、野田憲一郎、畑秀信、東雅、廣瀬貞雄、藤田繁雄、二本節夫、保母武彦、前沢祐一、松尾敬志、三沢日出夫、三十尾誠、光永正樹、宮田俊一、宮本貞雄、明神知、森保知、森藤正人、山田靖則、山本光二、山本彰三、横尾秀次郎、吉田真三



# 4カ所で写真展開催

## 「ヒマラヤー変わり行く景観」

野田 憲一郎

いま、4年がかりで開催に奔走した表題の写真展を4カ所で実現し、曲がりなりにもヒマラヤの現状を日本の人々に伝え、山への恩返しができたとホッとしているところです。

私はかねてから地球温暖化に関心がありましたが、2007年10月、山の環境保護をテーマに松本市で開催されたアジア山岳連盟のシンポジウムでネパール山岳連盟会長アン・ツェリン氏のヒマラヤ地域の温暖化問題についての講演を聴講しました。主要なポイントは、温暖化による氷河の後退、氷河湖の生成の現状と氷河湖決壊の脅威でした。

この問題を調査中、カトマンズに本部のあるICIMOD（山岳総合開発国際センター）が「Himalaya-Changing Landscapes」の題で、約50年前と現在のヒマラヤの自然と人びとの比較写真約40組の写真展を世界で展開していることを知りました。この写真展の目的はヒマラヤの自然と人々が受けている気候変動の衝撃と、そこでの暮らしの変化を世

界に知ってもらうことです。12枚のパネルは氷河の後退、町や村の変化、住民の成長の3つのテーマで構成され、過去と現在の同じ場所、同じ人物を対比して見せています。

写真展は最初にエベレストBCで開かれて世界の登山者の関心を呼び、続いてヨーロッパの数都市で開かれましたが、ヒマラヤに縁の深い日本では手が上がりません。そこで



HAT-Jの会合で

私は所属する山岳環境保護NPOのHAT-J（日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト）名での日本開催を決意、ICIMODの了解を得ました。

予算は3<sup>桁</sup>×2<sup>桁</sup>パネル12枚で30万円。企画書を作りスポンサー探しにかかった時にリーマンショック。それから2011年初頭まであちこち歩きましたが、成果はありません。ICIMODのアドバイスもあり、パネルを1<sup>桁</sup>×0・75<sup>桁</sup>に縮小して自費で制作しました。さいわい2011年7月に横浜で開催された環境問題の国際シンポジウムISA P2011に出品することになり、

やっと日の目を見ました。

続いてHAT-Jの20周年記念パーティー、日本山岳会の年次晩餐会と山岳関係者の集まりに展示、12年2月に横浜市青葉区役所で初めて一般市民に見てもらいました。今年4月には阪大吹田体育館に設置したクライミングゲウオールのお披露目会で展示。現役山岳部員やOBから注目されたようです。

6月には「国際山岳年+10」シンポジウムで展示する予定です。もっとたくさんの人々にヒマラヤの現状を見てほしいので、各方面にパネルの貸し出しをオファーしています。（1960年経済学卒）

## 自転車と東北野宿旅

### 歌とお話のポランテニア

堺谷 弘

私はこの6年、毎年5月に自転車の野宿旅をしています。昨年は四週一周を予定していましたが、3月に

東日本大震災が起き、4月上旬に震災ポランテニアのポスターを目にしたことで「今年は歌とお話のポランテニアをしながら東北を旅しよう」と思い立ちました。茨城県水戸市のホテルへマウンテンバイクを送って

おいたうえで5月1日に水戸を出発、いわき市、郡山市、福島市の北まで16日間の旅をしました。

水戸からは国道6号線を北へ。3日には福島県の勿来の関に着きました。このあたり、国道は太平洋岸ぎりぎり走っています。民家が2軒ぐしやりとつぶれているのを見ました。今回の旅で地震の被害を直接に

見たのはこれきりです。民宿5軒、ホテル2軒、いずれも津波被害のせいか、「工事関係者で満室」と、全部断られました。「今夜は雨が降りそう。さて、どうしようかな」と思いながら走っていると、ペンションを見つけました。しかし、廃業して玄関の扉は閉まっています。玄関前には2層くらいの庇が出ているので、この下で野宿することにした。果たせるかな、その夜半、雨がたっぷり降りました。そこで一首、

廃屋のペンションで過す雨の夜や  
捨てる神あれば拾う神あり

翌朝、夜来の雨も上がり、いざ旅立ち。国道6号線をさらに北へ進み、いわき市の市役所に着きました。避難所の所在を尋ねると、近くの体育館と公民館にあるとのこと。早速、訪ねて行って歌とお話のボランティアをさせてもらいました。

私はこの8年来、修慧（しゆえ＝自分の体験、実践によって会得した智慧）の物語、たとえば、諺と格言物語、遭難物語、奇蹟物語、詐欺物語などを書いておられます。これらの物語と小話、謎々、ミニ落語のほか、歌詞を配っての合唱など40〜50分間の歌とお話のボランティアを一昨年秋から各地で続けてきました。

5月9日、郡山市では総合福祉セ

ンターにお年寄りがステイしておられると聞き、ボランティアをさせてもらいました。一人の老婦人が歌を何回もリクエストされ、終わったら、そばにやって来て、「ありがとうございしました。これ、私の気持ちです」と千円紙幣を渡してくれました。翌10日の夜、夜空に三日月を見て一首作りました。

みちのくや独り行くらん月の船  
地震(ない)の街々見下ろしつつ

13日、寝袋とエアマットを入れたリュックをなくし、その夜は寝袋なしで野宿しました。明け方の寒かったです。

14日、近藤建設という会社の倉庫



鎌倉市大磯で

を見つ、今夜はここで野宿しようかなと思っていると、社員の矢部さんという方が現れ、「ここでもいいですが、すぐ近くに公園がありますよ」と案内してくれました。この公園でしばらく休んでいると、再び矢部さんが来て、「これ、私が20年前に四国を旅した時に使った寝袋です」と、ほとんど使っていない寝袋を差し出してくれました。

寝袋を我に与えし君なりや

四国の旅で使いしと言いて

これも捨てる神あれば拾う神あり  
ですな。

.....

15日、国道4号線を走っていて、南国フルーツという果物屋でオレンジを購入しました。この店の奥さん、大越智子さんは「私、福島原発の放射能の害、放射性ヨードによる甲状腺がんの予防のために、とろろ昆布を一生懸命売っています」といいます。「昆布にはヨードが含まれ、ヨードを十分摂取しておく」と放射性ヨードを受け付けないのです。それを聞いて私は「昆布以外にも放射能の害を防げる食品、薬品、サプリメント（健康食品）があるかも知れません。大阪へ帰ったら、それらを調べて、またお便りします」と、宿題をもらって帰途につきました。

みちのくやボランティアの野宿旅

放射能の宿題をもらいて  
.....

帰りの新幹線の中では落合治光さんという方と出会いました。あの南国フルーツの奥さんの話をするると、「私も放射能の害を防ぐことに関心を持っていました」と『放射能汚染から命を守る最強の知恵』という本を紹介してくれました。帰阪して、この本を購入しました。昭和20年8月9日、長崎への原爆投下のあと、被爆者の救護と治療に活躍された秋月辰一郎医師は「爆心地から1.4kmの私の病院の仲間が焼け出された患者を治療しながら働き続けた。私たちの病院は長崎市の玄米、味噌の倉庫になっていて玄米と味噌は豊富であった。更にわかめ、もやしも沢山貯蔵していたのである。その時、私と一緒に患者の治療、救護にあたっていた従業員に原爆症が出なかつたのは玄米と味噌とわかめをたっぷり摂取していたためと確信している」と、この本で話されています。

1988年にチェルノブイリ原発の事故が起きたあと、この話がロシアに伝わり、日本から大量の味噌が輸出されたと言います。

この本には、放射能の害を軽減する原則として次の3つをあげています。

・発芽しかけの玄米を摂る



・米味噌、麦味噌よりも大豆味噌を撰る

・精製した白砂糖は撰らない

15日、福島市のコンビニで『東日本大震災』と題する写真集を見つけました。その中の2枚の写真を見て短歌を作りました。

震災で家失える女子(おみなご) 覆くものもなく膝かき抱く

.....

子を負いて地震(ない)で倒れし 我が家の前 見つめる女(おみな) 何思もおるや

◇

帰阪してから私は、放射能の害を軽減できる種々の提言を盛った『放射能物語』を書きました。そして福島県のテレビ局5社、新聞社4社に「これを放映または紙上に載せていただきたい」と書いて送りました。これによって福島県の2005万人の人たちの放射能に対する恐れや心配を少しでも軽減でき、歌とお話のボランティアよりでっかいボランティアができたかなと思っています。

(1953年理学部卒)

## P29記録のDVD保存完成

## 阪大図書館などへ寄贈

P29第1次遠征隊派遣(1961年)から50年が経過したのちに

で設けられた「P29第1〜4次遠征記録保存委員会」(委員長 住吉仙也、幹事 山本光二、三枝礼子、木村裕一、西川元夫、兼清喜雄、大野義照)による遠征資料の電子データ化が完成、大阪大学附属図書館などに寄贈しました。

この保存委員会は2010年11月に設立され、4次にわたる遠征に参加した元隊員らに写真、スライド、映像フィルム、記録などの資料提供を呼びかけました。その結果、昨年7月までに集まった資料を兼清氏のもとでDVD4枚から成る「P29第1〜4次遠征(1961〜1970)の記録」に写真に収録しました。



図書館に寄贈したのは、これに「P29西面」(篠田軍治著、1962年刊)、「P-29 1961〜1970」(1975年刊)の報告書2冊を加えたものです。豊中キャンパス内の附属図書館に1セット、箕面キャンパス内の大阪大学文書館に2セットをそれぞれ寄贈しました。これらの資料は附属図書館の総合図書館で閲覧、借出しができます。文書館は大阪大学に関するあらゆる文書を保存するところで、2年後のオープンを目指しています。

なお、収録したデータのうち、元隊員から提供いただいた資料にはデータの説明が十分にできないものも含まれるほか、16mmフィルムには著作権の問題もあるため、DVDの配布は元隊員に限定し、制作費は元隊員からの拠金によりました。

(文責・大野)

〈お知らせ〉 次の文章は故篠田軍治会長をしのぶすがにと大工原恭氏(歯63卒)から転載要請があったものです。大阪大学歯学部学生自治会誌「SDZ」12巻(1961年10月25日発行)に掲載されました。「P291次隊の帰路にテントの中で書かれたと思われ、当時の歯学部関係者以外の目にはふれていないはず」(大工原氏)とのこと。用語などは

原文のままとしました。

.....

### ☆特別寄稿★ ヒマラヤ遠征のこと

―ドナ・コーラ畔にて―

大阪大学山岳会ヒマラヤ登山隊長  
工学部教授

篠田 軍治

#### 1 クーリーのスト

今度の遠征は記録のない所を偵察しながらベースキャンプを移動させていった点に、今までのヒマラヤ遠征に見られない特長がある。だからベースキャンプが捕鯨母船の様な役目をして、母船からキャッチャーボートが出て行く様に、小規模な隊が幾組も附近の山へ、或は偵察に、或は試登に出掛けて行ったわけだ。こんな遠征形式は今までになかったものだけに何と呼んでよいか分からないが、一心 Carrier Base expeditionと呼んでおこう。

この形式は確かに面白いものではあったが、何分にも今までに誰も通ったことのない所を、時には百人以上のクーリーを連れてキャラバンをやるのだから、いろいろなトラブルがおこる。たゞでさえ、ヒマラヤのクーリーというものはトラブルを起し易いもの。遠征の記録には必ずと言ってよい位にトラブルの記事がある。今日(五月三十日)帰りのキャ



ラバンを始めたところで、予定から言えば明日はナジェという街道筋の部落へ出ることになっている。そうなるどクーリー達には一日六ルピー（一ルピーは四五円）の日当では大した金にはならない。昨夜はナジェの村から来たクーリーの代表がやって来て、明後日のコースは危険だ。自分は上の道を知っており、その方が安全だから、そちらを通らせてくれ、たゞ上の道は二日か、ると言

って来た。今晚我々の泊まっているキャンプ地からナジェまで二日と言うのだが、事実は三時間半ほどの行程だ。馬鹿にするにも程がある。確

に道の悪い所はある。しかしこれは既に二日ばかりで固定綱をつけたりして道路工作は済せてある。彼らもやつと納得したが、今朝になって果してぐずぐずしている。特にチベット人のクーリー十人程が動かない。ベースキャンプには多少の資材が残っている。それが残っている以上はスタート出来ないものと、たかをくくっている様だ。こうなると、彼等の心理は読める。彼等の目の前で、彼等にとっては血の一滴にも相当するが、我々から見れば確に余分で、不要になったケロシンに火をつけて燃してしまふ。また余分の食料も川の中へ放り込んでしまった。これで彼等もやつと動き出した。

しかし夕方になると岩小屋の所から一步も動こうとしない。隊員の方はキャンプ予定地に到着したが、テント、防寒具、食料が不足だ。先発した腕のよいシエルパ三人を送った。彼等は鮮かにクーリー七人を引抜いて今晚のキャンプに必要な物資を持って帰って来た。シエルパ三人を第二組合の結成に派遣したようなものだ。

考えて見ると、クーリーのストは小生が直接タッチしたのだけで、今日で七回目だ。

## 2 各国のヒマラヤ装備

待ちに待った荷物がようやくポカラ空港に着いた。何よりの楽しみはピースだ。早速罐を空ける。シユツと心持よい音をたて、一辺に切れる。ここ二週間ほど英国製の罐入ばかり吸っている。英国製の罐を空けるとときにガタガタ音がして、一辺には空かない。日英の鉄鋼技術の差をまざまざと感じる。同じときに罐詰のビールが取出される。ビールそのものの味はもとより、罐の蓋にしてある鋼板の良さにつくづく見とれる。今回の遠征では小さな隊に分かれて行動する事が多かった。そのために隊員とシエルパが、同じテントの中で夜遅くまで、片言の英語やネパール語で語り合う事が多かった。彼らの話を総合すると、装備関係はス

イスと日本が最も良く、それに次ぐのは独、仏などで、英米となると遙かに落ちる。しかし食糧となると日本が断然トップで他国の追隨を許さないとのことだ。高所用のテントで内張りがあるのは日本とイスだけだ。靴はイスがよいが底はイタリア製だ。靴に関する限り、日本は四等国だと思っていたら、山靴ではイスの次がらしい。日本の靴もハンドメイドなら大したものだ。しかし万能ナイフとなると、イス製の無条件にかぶとを脱がざるを得ない。

日本の食糧がシエルパ達に好評なのは、日本隊が和洋はもとより、中華料理まで携帯し、米の使い方がうまい上に、彼等が食糧というよりも薬として珍重している海草をふんだんに持っているせいでもある。

## 3 ギャルツェンの思い出

ランタンリルンの市大隊の遭難のことは、ベースキャンプでカトマンズ放送十八日、十九日ので聞き、住吉副隊長、西川隊員が山から降りてくると直ぐに、後仕末応援のため出發させた。彼らは二十日午後、新ルートを通ってカトマンズに急行した。市大隊は阪大隊と絶えず連絡しながら準備を進めていた間柄、ギャルツェンがついているので、登頂成功疑いなしと信じていただけに、今度の事件は本当にショックだった。カト

マンズ空港まで送ってくれた森本、大島両氏、カトマンズのホテル・ロイヤルに我々を訪ねて来てくれたギャルツェンの面影が、いつまでも眼に残って消えない。

ギャルツェンとは五年ほど前に新大阪ホテルで会って以来だ。あの時の話がいろいろと出て来る。あの時はロビーで随分長い間話しこんだ。浅間山から煙の出ている油絵がある。ネパールには活火山がないので、想像が付き難いらしい。彼は山と言えばエベレストのようなものを直覚する。それが煙を吐いたらどんな恐ろしいものになるか想像に難くない。浅間山の煙を見て、彼はそのような山を想像したらしい。こんな恐ろしい山は登る気がしないと聞いたのは、こちらがあきれてしまった。

日本へ来て何が一番珍しかったかと聞けばエスカレーターだと答えた。なるほどカルカッタは人口六百万の大都会と号していても、エスカレーターはない様だ。

ホテル・ロイヤルで別れの際、彼は徳永、住吉ら阪大OBになじみがあるせいか、今年もよほど阪大隊について行きたかったらしかった。来年はぜひ阪大隊と行を共にしたいと言っていた。

今度の阪大隊のサーダー（シエル

パの頭)のアジバは好人物だが、甲斐性がない。柄の悪いクーリーに賃金のことなどで難詰されると、すぐ腰がフラフラする。そんなときに

## 米国から笠松氏も

### 夏の白馬集会

2011年度の白馬集会は8月27日から長野県白馬村八方の「ホテル対岳館」(丸山徹也館主)で開かれ、長年、米国に在住する笠松卓爾氏(医63)の初参加をはじめ、会員家族を含めて15人が参加した。

初日は開会式と、夕食を兼ねた懇親会のと、いつも通り、別棟の「與兵衛倶楽部」に席を移し、夜遅くまで歓談が続いた。今回は笠松・田井両氏が立山登頂後、黒四ダム經由で、横尾・出雲路両氏が蓮華温泉、白馬大池經由で会場入りする元気さを見せたのが注目された。

2日目は自由行動。3日目の懇親ゴルフは安曇野市の穂高カントリークラブで開かれた。

出席者は次のみなさん。(会長以外は卒業年次順)

大野義照▽山本光二▽宍戸元▽兼清喜雄▽野田憲一郎▽笠松卓爾▽田井英男▽保母武彦▽横尾秀次郎▽高田邦雄▽出雲路敬孝▽山田靖則▽田中喜樹▽稲垣佳夫

はいつも、これがギャルツェンだったらなあという嘆きが先に立つのである。

## ネパール料理団んで

### 2012年新年会

本会の2012年新年会は1月26日夕、いつもの阪大中之島センターから場所を変えて西区靫本町のネパール料理店「カトマンズカフェ」で開いた。山岳会員、現役山岳部員と、大阪外国語大学山岳会(OGAC)からも事務局長ら2人を迎え、計22人が参加した。

席上、大野会長から、P29遠征記録の阪大附属図書館、文書館での保存が決まったこと、現役山岳部が要望していた吹田キャンパス体育館へのクライミングウォール設置に大学側の認可が下りたことなどが報告され、大いに盛り上がった。

出席者は次のみなさん。(会長以外は卒業年次順)

阪大山岳会 大野義照▽堺谷弘▽山本光二▽木村裕一▽宍戸元▽西川元夫▽岡田博司▽五百蔵弘典▽打出英樹▽梶本孝治▽大川和秋▽高田邦雄▽豊坂昭宏▽甲田吉彦▽山田靖則▽明神知

大阪外大山岳会 船井総一事務局

長▽上島康嗣

阪大山岳会 西村俊輝(医3年)

▽島孝典(同)▽小川勝洋(同)

▽角谷勇(文1年)

## 東京支部だより

### 遅まきながら「宴遊会」

東京支部の今年最初の集まりは「宴遊会」と名付けて4月25日夕から神田神保町の「八羽」で開きました。出席者は大島輝夫、兼清喜雄、野田憲一郎、山本信樹、村井忠雄、前澤祐一、横尾秀次郎、糸井文彦、石原敏雄、井上太一の各氏(卒業年次順)と出雲路敬孝の11人で、近況や様々な活動報告を興味深く聞きました。

大島氏からは、日本山岳会(JAC)会報「山」今年1月号に、いわゆる「ナイロンザイル事件」に関する記事があり、この記事の元になった緑爽会の会報に多くの誤りがあることを3月のJAC総会で指摘、会長はじめ出席者の理解が得られたとの報告があった。また山本氏からは、5月連休中に横浜で開催される帆船模型展の紹介があった。

このほかP29遠征記録の保存作業完了(兼清氏)、ヒマラヤ写真展開催(野田氏)、旧東海道踏破(横尾氏)

などの報告があったが、内容は会報の他の面の記事に譲ります。(出雲路記)

## 大町山岳博物館から転載願

### 白馬主稜などの「時報」記事

長野県大町市の大町山岳博物館友の会(宮澤洋介会長)から、当会の旧会報「時報」に掲載された記事の転載許可願が事務局に寄せられ、承諾した。

第1号の「厳冬の白馬主稜」(徳永篤司氏執筆)、第3号の「南股概説」(大島輝夫氏執筆)で、本会のホームページで見つけ、同博物館が制作中の資料集「北アルプス登山史資料」2 白馬岳周辺登山史」に転載するという。

## 会員の近況

白馬集會や新年会の出欠はがきから抜粋。その後の変動などは未確認。卒業年次順 西暦。敬称略

宍戸氏が親子写真展 写真を趣味とする兵庫県川西市在住の宍戸元氏(医57卒)が昨年9月、阪急川西能

勢口駅前前の画廊で「祭」をテーマにした親子写真展を開いた。5年前に訪ねたプータンの祭りをはじめ、青



笠松 卓爾

1960年代後半、阪大医学部と  
大学病院は中之島にあり、周りはビ  
ル街。夕飯時を逃すと、夜半の大学  
病院前に入る「夜鳴きソバ」以外に  
食い物にありつけなかった。そこで、  
当時売り出し中のウイスキー、サン  
トリー・レッドで活力を補給し、タ  
バコで一服の徹夜実験となる。数年  
来のこんな不摂生がたたって、大学  
院4年生の春、徹夜実験明けのある  
朝、突然、研究室で椅子から転げ落  
ちた。心臓発作。ウイルス感染によ  
る心筋炎で、急性肝臓障害を併発。  
1カ月ほど入院後、半年間の自宅静  
養となった。

米国外行きを考えたのはこのころ  
だ。外国生活への好奇心に加え、病  
み上がりの身で、「少し海外で静養  
でもするか」とばかりに69年9月、  
機会あってカリフォルニア大学ロス



これから一走り

アンジェルス校(UCCLA)の医学  
部解剖学科に留学した。交換研究員  
ビザの期間制限もあって、最初の契  
約期間は通常の2年間。以来、仕事  
場選びは「行き当たりばったり」の  
連続で、まさに生物の本性丸だしの  
過程を辿った。

## まだ続く米国暮らし

この滞在ビザが切れたた  
め、一時、米国を抜け出し、  
73年2月から旧西独ゲッチ  
ングンにあるマックス・プ  
ランク生物物理化学研究所  
に在籍。74年12月末に米国  
移住者としてカリフォルニ  
アに戻った。仕事は、パサ  
デナ市にあるカリフォルニ  
ア工科大学(カリテック)  
生物学部の上級研究員だっ  
た。

私の半生の仕事は、動物  
モデルを使った脳科学の研  
究だ。色んなタイプの光あ  
るいは図形刺激に反応する中枢視覚  
系神経細胞の反応様式・強さをもと  
に、脳内での神経細胞ネットワーク  
の構築をさぐってきた。カリテック  
でのポストドクの9年間は他人の金  
を十分に使って好きな仕事ができ、  
研究者冥利につきた。

84年4月には、うまく更新できた  
グラント(研究助成金)を提げてサ  
ンフランシスコにあるスミス・ケト

ルウエル眼科・視覚研究所(非営利)  
に移籍し、笠松研究室を立ち上げた。  
45歳にして一国一城の主となる。こ  
の笠松研を21年間余維持したあと  
2005年末に閉じ、跡始末の論文  
書きに専念した。つい先日、サンフ  
ランシスコのアパートをたたみ、パ  
サデナ市にある1970年以来的の本  
宅に無事撤収した。ちなみに私の妻  
は78年春以来、UCCLAの生物学部・  
分子生物研究所に在籍し、学生を教  
え、ウイルス増殖機序の研究を続け  
ている現役だ。

2007年4月には10年ごとの米  
国旅券を更新した。この前後に、現  
役引退生活の大先輩である大工原  
恭さんの奨める「軟着陸」を志し、  
K2峰第2登者、リック・リッジウ  
エイ著『Below Another Sky』の  
日本語訳を完成させた。が、未だに  
出版元探しを続けている。もう1件、  
故川喜田二郎著『発想法』英訳の方  
は初稿もまだ道半ばだ。

身体を無視しては頭も働かない。  
高齢者ともなればなおさらだ。さて、  
どうするか? 最近はランニングに  
いそしむ毎日だ。昨年7月末にはサ  
ンフランシスコ・マラソンを走った。  
目下、5月20日のパサデナ・マラソ  
ンに向けて特訓中。独りで18週間の  
訓練日程をこなして16週間目を終え  
た。(1963年医学部卒)



森県五所川原  
市のねぶた祭、  
福井県勝山市  
の左義長祭を  
テーマにし  
た、三女奈津  
子さんの作品  
と合わせた計  
17点を展示。  
地元の方や知

人らが訪れ、熱心に鑑賞していた。  
宍戸氏はまた、昨年11月の「秋の  
叙勲」で瑞宝双光章を受賞した。長  
年、監察医として警察に協力した功  
績が認められたという。

村井 忠雄(工61) 軽いハイキン  
グとスキーを楽しんでいます。初め  
て山形蔵王に行き、天候に恵まれ、  
樹氷原を満喫できました。大震災以  
後は越後湯沢と熊の湯温泉に行けま  
せんでしたが、スキー行は7回、延  
べ22日間となりました。落下運動だ  
からできるのでしょう。

梶本 孝治(工63) ここ1、2年、  
体調を崩して病院通いに過ごしてき  
ましたが、やっと復調しました。母  
の木寮建設ボッカ合宿をした仲間  
が集まる「梅の木会」(2年に1回)  
は昨年、3回目を迎え、5月に神戸  
に集まりました。互いに頭も白茶け、  
セメントや材木を荷上げした雄姿は  
想像もできませんが、口だけは達者

な楽しい集いでした。次回は少し年  
度も広げ、メンバーを多くしたいと  
思っています。

**三沢日出夫**(工63) 直腸がんの手  
術で人工肛門をつけてから10年、食  
道のポリプ除去から5年が経過し  
て一安心していたら「ADH分泌異  
常症」とやらで、特定疾患医療を受  
けました。しかし、これは点鼻薬さ  
え使っておけば何も不都合はありま  
せん。昨年末、初孫(女の子)がで  
きました。大阪にいたので、爺・  
婆の2人暮らしです。

**横尾 秀次郎**(工64) この春、東  
京・日本橋から京都・三条大橋まで  
の旧東海道の徒歩旅行をしてしまし  
た。気力のあるうちに歩く旅と思っ  
たのです。全長約512<sup>キ</sup>、1日  
平均30<sup>キ</sup>、16日間の旅でした。旧東  
海道は大半が自動車道になっていま  
すが、今も、ひっそりとながって  
います。機会があれば一部でも歩か  
れたら楽しいと思います。簡単な行  
程を付記しておきます。

2月21日(晴) 日本橋―川崎―横  
浜38<sup>キ</sup>▽22日(曇、晴) 横浜―藤沢  
―茅ヶ崎―平塚35<sup>キ</sup>▽23日(雨のち  
曇) 平塚―小田原―箱根根宿33<sup>キ</sup>▽  
24日(晴) 箱根―箱根峠―三島―沼  
津31<sup>キ</sup>▽25日(雨のち曇) 沼津―吉  
原―蒲原―由比36<sup>キ</sup>▽26日(曇) 由  
比―興津―草薙―静岡25<sup>キ</sup>▽27日

(曇、晴) 静岡―丸子―藤枝―島田  
32<sup>キ</sup>▽28日(晴、曇) 島田―金谷―  
白坂―掛川―名栗―袋井32<sup>キ</sup>▽29日

(雨、曇、晴) 袋井―磐田―浜松―  
浜名湖35<sup>キ</sup>▽3月1日(晴、曇) 浜  
名湖―新居―二川―豊橋27<sup>キ</sup>▽2日  
(曇、雨、曇) 豊橋―伊奈―御油―  
赤坂―岡崎35<sup>キ</sup>▽3日(晴れ) 岡崎  
―安城―碧南―常滑―(高速船)―  
津42<sup>キ</sup>▽4日(雨) 停滞、墓参▽5  
日(雨、小雨) 津―一身田―椋本―  
関宿24<sup>キ</sup>▽6日(雨、曇) 関―坂下  
宿―鈴鹿峠―水口31<sup>キ</sup>▽7日(曇)  
水口―三雲―夏見―石部―草津―瀬  
田38<sup>キ</sup>▽8日(晴) 瀬田―逢阪―山  
科―日ノ岡峠―粟田口―三条大橋21  
<sup>キ</sup>、先斗町で打ち上げ(大川、岡久、  
桑原、高田4氏主催)

※参考文献「東海道一里塚ウオ  
ーキングガイド」(月刊日本橋)制  
作)

**大川 和秋**(工64) 日常生活で①  
呼吸②歩行③よく噛むの3点を特に  
意識してリハビリに専念中。今年の  
快復目標は(1)歩行・ストックな  
しで2<sup>キ</sup>、ストックの助けて20<sup>キ</sup>。  
壁を相手にテニス(2)数日の団体  
ツアーの中で行動(3)京都周辺の  
山歩き10〜20<sup>キ</sup>(4)軽い駆け足の  
できる状態へと設定しました。時間  
をかけ、根気を失わなければ、年齢  
とはほとんど無関係に鍛え直せるも

のがあることを我が身で実験してい  
ます。

**黒田 治朗**(医69) しばらくは週  
2日の嘱託勤務の予定です。体力維  
持のゴルフを続け、ボケ防止のオベ  
ラ鑑賞と、さらに囲碁を再開しよう  
と考えています。

**畑中 薫**(医69) 精神科の医師  
として研修5年目で、やっと精神保  
健指定医の資格を得ました。週4日  
の8時間勤務と片道2時間の通勤で  
だいたい時間がつぶれます。余った  
時間は臨床医学の勉強、居眠り、旅  
行、カラオケなどです。

**上松 一雄**(工75) 菱友システム  
技術という会社に移って2年目。仕  
事で品川と高砂を行ったり来たりし  
ています。最近は何の余裕もでき、  
夫婦で旅行も楽しんでます。

**大宅 幸夫**(歯76) 総会では牙科(台  
湾に行ったら、歯医者はこちら書いて  
あるんです)の新年会とバツティン  
グしてしまいました。最近は何登り  
の仲間も年を取って過激さがなく  
なり、「まったくと火を囲んで飲む」  
機会が増えてきたように思います。

**奥山 宏臣**(医84) 兵庫医科大学  
小児科に来て4年目になります。今  
年は5月の穂高と夏の沢登り、秋山  
ぐらいには行きたいなあと思いま  
す。クライミングウォールの完成を  
楽しみにしています。

**河野 美樹**(医05) 相変わらずパ  
ラグライダーを楽しんでいます。体  
重が増加する一方で歯止めがかから  
ないため、時々、マラソンをしてい  
ます。

**渡辺 景子**(基礎工05) 最近流行  
の「山ガール」の服装がかわいくて  
いいなあと思います。もう10年早く  
流行が始まって、私も「かわい山  
岳部員」でいたかったです。2月に  
埼玉県桶川市の実家に戻りました。

**大谷(旧姓乾) 恭子**(医05) 富山  
大学に単身赴任中です。雪山は好き  
でしたが、雪国での生活は想像した  
以上に大変です。それでも冬の日本  
海の幸と、晴れた日の立山連峰は最  
高ですよ！

## 編集後記

徒歩で日本列

島縦断(井上氏)、  
マッターホルン登頂(明神氏)に  
加え、長老・堺谷氏の東北自転車  
行……。中高年組の元気のよい報  
告に続いて、現役待望のクライミ  
ングウォール完成など重要ニュー  
スも相次ぎ、編集者としてうれし  
い悲鳴でした。それもあって後半  
の恒例行事の写真や「公員の近況」  
の一部を割愛せざるを得ませんで  
した。次号にご期待下さい。特に  
若い会員諸氏の山行記録に期待し  
ます。(会報担当・高田邦雄)